

瓜生島沈没伝説

瀨 敏 博

はるか昔に、ムーやアトランティスという大陸が、太平洋や大西洋かにあったという。これらが世界的規模の大沈没なら、あたかもこれがミニチュア化され、再現したかのような島の沈没伝説が身近なところにある。

温泉観光都市として有名な別府、その眼下に広がる別府湾に存在していたという「瓜生島沈没伝説」がそれである。四〇〇年ほど前のことだったとされながらも、これが史実であったかどうかは未だ決定打をみないで、伝説だけの幻の口マンに終わっている。

注目してほしいのは、ムーやアトランティスの沈没と共通するのに、「神の怒りにふれて、巨大地震により沈没した」ということだ。はたして、その神とはいったい……。

瓜生島沈没伝説

その昔、別府湾には、瓜生島・大久光島・小久光島・東住

吉島・松島などの島々が浮かんでいた。

なかでも瓜生島は、東は萩原沖、西は白木沖にかけて横たわる美しい島で、東西約四キロ、南北約二キロあまりもあり、いくつかの岬をもっているが山や丘はなく低い洲浜のような島で、あちこちにある老松や松林が風景を引き立てていた。

室町時代には島は豊後一の貿易港として、各国からの入り船で賑わったという。当時は一二カ村、戸数一〇〇〇戸を数え、島長の館を中心に三条の大通りが走り、南本町・中裏町・北新町と呼ばれ、大分から瓜生島・久光島を通って別府へ抜ける交通路が開けていた。

島長の幸松勝忠は、たいへん信仰心の厚い人で、島には威徳寺・阿含寺・住吉神社・菅神社・蛭子社等の寺社が立ち並んでいた。文禄四年には阿弥陀寺を建立するための僧行恵が島へ勧進に来たという。

島には古老たちによって、古くからの言い伝えがあった。それは「瓜生島に住む人々は仲良くしなければならぬ。一人でも仲違いする者あれば、島じゅうの神仏の怒りに触れ、島は海中に沈んでしまう。そのあらわれとして、蛭子社の神将の顔が真っ赤になる」というのである。

文禄五年（一五九六年）六月下旬のこと、島の南西端の申

引村に住む加藤良斎という医者が、「そんな言い伝えなど気にする事はない、天変地変など実際に起こる筈がない。俺が試してやろう」

と、蛭子社に奉祀してある一二神將の顔を、丹粉たんごで真っ赤に塗り潰してしまった。

島の人々は、それを見て、

「大変なことをしてしまったものだ。何か異変が起こらねば良いが……」

と、気をもんでいると、果たしてその翌月（改元慶長元年六月）の初め、地震があり、続いて一六・一七日にも、日に数回地震があった。

島の人たちは「良斎はたいへんなことをしたものだ」「地震は神仏の怒りの前兆だ」とささやきあい、島が沈むのではないかと南大分の方まで逃げる者さえ出てきた。

翌閏七月にも、四日・五日と立て続けに地震が起こり、更に一日・二日と続いて未刻（午後二時頃）になると、島は激しく揺れ始め、高崎山・木綿山（由布山）・御宝山（霊山）等の山々が一度に火を噴き、大きな石が空から降り注いできた。人々は、慌てふためき、島から逃げようと、荷物をまとめると、申刻（午後四時頃）になって一時静かになった。

その時、白馬にまたがった一人の老人が、島じゅうに、「瓜生島は沈んでしまふぞ、一刻も早く避難せよ！」と、大声でふれ回った。

島の人々は、皆我先にと、舟に乗ったり、泳いだりして、府内（大分市）や日出の街を目指して逃げていった。この老人は、神の化身だったと言われる。老人の子告通り、一刻ほど後に大地震が起こり、もの凄い高潮が島を襲った。

島長の勝忠も、息子の信重を伴って小舟に乗り、命からがら逃げ延びた。併し、海上は波が荒く、小舟はたちまち波にさらわれ、二人は海中に投げ出された。

勝忠は、信重の手を堅く握ったまま、波にもまれていた。大量の水を飲んで意識がもうろうとしていた。その時、夢とも無く、現とも無く、大空から声がして、一本の竹が差し出された。勝忠は、夢中でその竹にしがみついたが、それっきり波をかぶって気を失ってしまい、気が付いたときには、二人とも高崎山の麓に打ち上げられていた。

一夜明けて、地変は収まったが、海上には島影一つ無くなっていた。瞬時のうちに沈下してしまったのだった。

生き残った者はわずかに七人、行方不明者は数知れず、溺死者は七〇〇余人と言われる。

民話研究家の土屋北彦氏は、この瓜生島伝説について次のように述べている。

瓜生島もまた神意になつた理想の島であり、信仰心の厚い島民たちの手によつて、多くの神社・仏閣が建ち並び、更に新しい寺の建立も計画されていた。そして、その神意になう方便として、人々に仲良く暮らすことを教え、その教えを守らねば、島が沈むという厳しい罰を科したのであった。

もともと、この種の伝説は、禁忌を一方の軸として、他方これに逆らつて行く民衆の智慧を主題として展開する。瓜生島伝説の場合は、言い伝えに反抗する良斎が、勇気をもつて神像の顔に朱を塗りつける条りで、この場面は語り手と聞き手の心に、不快と快哉を共有させる効果を持つ、島沈没と言うドラマチックな要素と同時に、こうしたタブーへの挑戦という主題が、多くの民衆の心を捉え、それが伝説を後世に伝える大きな役割を果たしたと思われる。

神像の顔に丹粉を塗つた人物は、科学者である医師良斎であつた。彼は古伝を否定し、迷信を正すことを、医者 of 良心として当然考へに入れていたであろう。その結果として、たとえ島が沈むと言う事実が発生したとしても、科学者である彼がそれを肯定する筈がない。良斎の行動によつて、民衆は

新しい知恵を獲得したのである。民話はこのように禁忌の克服の歴史でもある。

洋の東西を問わず、伝説にはその下敷きとなるような過去の事実が秘められているものである。伝説は特定の時代や地名・人名などを語り伝えていて、よしんば伝承の過程でそれが誤り伝えられる場合があつても、昔話のような語り口やすじ立てのおもしろさに力点を置いて引き継がれるのではなく、あくまで事実としての出来事を遺そうとする意図を持つた話として、後世に伝わつたものだからである。

瓜生島は、今からわずか四〇〇余年前に沈んだとされるにも関わらず、当時そのことを記録したものが極めて少ない。古地図や伝承、記事など民間に伝わるものは多少あつても、正史としての為政者側のものは全く無いと言つていい。全国 of 大名の中で最も多く古文書が遺されていると言われる「大友史料」の中にも見られない。島がすつぱり沈んでしまつたという重大事件が、もし本当にあつたとしたなら、為政者たちは故意にこの事を伏せたのではないかと疑いたくもなる。時あたかも豊臣秀吉の朝鮮出兵の頃だから、人心の動揺を防ぐ意味で、正史から抹殺したのではないかと思われるくらい、見事に歴史から消されている。

と言うのは、島はもともと無かったという前提に立てば、納得できることだが、そう簡単に島の存在を否定できない、いくつかの点があるからである、と述べている。

確かに、沈没以前の史料に「瓜生島」としては登場しないが、「沖の浜」という地名が頻繁に出てくる。

大友氏は、南蛮貿易によって巨万の富を築いていたというが、この南蛮船が停泊していたのが、沖の浜であり、ここが日本最大級の国際海港都市であったことは、その貿易額からみても明らかである。

沖の浜という名称からみても、瓜生島とは、大分川の河口付近に形成された砂洲が発達したもので、これが慶長元年の直下型地震によって液状化を起こし、大津波によって、海中に崩れるように沈んでいったのではないかと考えられる。

つまり瓜生島とは、沖に浮かぶ島ではなく、「沖の浜」という地名があったごとくに、今の「かんたん」あたりからの出島のようなものではなかったか、ということである。

地名説話にちなんだものといえば、左の別府市小字図をくらんいただきたい。これは別府北部の亀川地区のものだが、その中央部に「ウリヲ」「瓜生泉水場」「瓜生姫山」「瓜生味噌畑」という小地名があるのが確認できる。これは、瓜生島沈没で

生き残った人々が漂着して、斜面を段々畑のように切り開いたところだから、と伝わるのである。

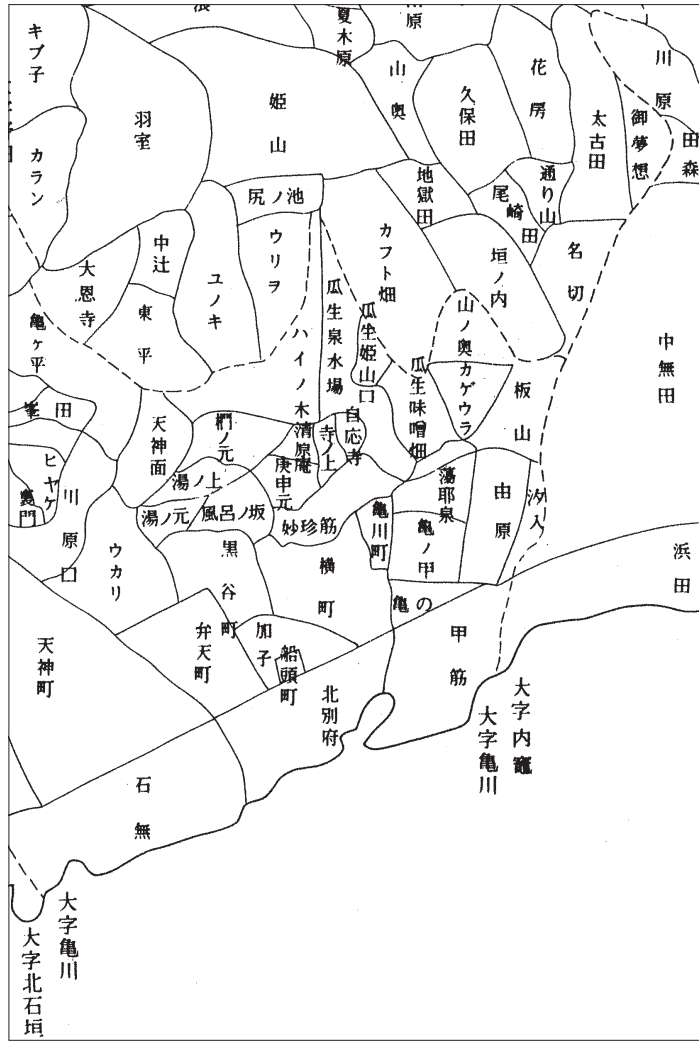
アトランティスとユリシーズ物語

沈んだ島の伝説として、ムー大陸と並んで世界的に有名なのがアトランティスだが、その島がどこにあったかは、大西洋の真ん中とも諸説あり、定かでない。

古代ギリシャの哲学者プラトンの著述である「クリティアス」「ティマイオス」によると、アトランティスは、大陸とよべるほどの大きな島で、そこには強力な軍事力を背景に反映した王国があったと……。

この島の初代の王が、アトラスという名であったことから、アトランティスと呼ばれているのだと……。

ギリシャ神話では、ギリシャの海神ポセイドンはクレイトに恋をし、彼女のために楽園の島を築いた。クレイトはポセイドンの息子たちを産み、彼らはアトランティス王国の基礎を島に打ち立てて支配した。しかし、後に支配者は貪欲になり墮落したので、ギリシャの最高神とされるゼウスの神の怒りに触れて、大津波により、島は沈み滅んだと……。



別府市小字図

トロイの遺跡を発見したことで知られるシュリーマンは、アトランティスの謎を解く鍵を、ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』に求めた。

オデュッセイアとは、十年つづいたトロイ（トロイヤ）戦争を勝利に導き終結させた英雄オデュッセウスの物語なのだが、シュリーマンは、この『オデュッセイア』には欠けた箇所があり、その失われた叙事詩や口伝の一部が、中東やインド、中国、日本に伝播していると考えた。

このオデュッセウスは、ラテン語でウリクセズ、英語ではユリシーズ。

とされ、一般的には、『ユリシーズ物語』という呼び名で親しまれている。

ユリシイズ物語

十年にも及んだトロイ戦争が終結して、ユリシイズは一路、故郷のイタケを目指すも、神の怒りを買ったとして、さらに十年にわたり地中海を放浪する。様々な苦難、怪物、誘惑を退け、ようやく故郷にたどり着いたユリシイズは、自国が、裏切り者により略奪寸前なのを知る。

ユリシイズの妻に、自分を王に推挙するよう脅す求婚者達。やむなく、妻はユリシイズ愛用の弓を出し、これを自在に操れる者と再婚すると宣言した。

実は、この場にはぼろぼろの布をまとい、物乞いに扮し、婿選定の宴に忍び込んだユリシイズがいた。ユリシイズは、弓を取るやいなや、求婚者達を次々に倒していき、再び王位に就いたという。ユリシイズの二十年にわたる放浪と冒険の物語である。

ユリシイズが最後に流れ着いたのは、西の果ての海に浮かぶ「シケリア」といって、代々ギリシャの海神ポセイドンの末裔が支配する巨大な王国だったと、ここでも、アトランティス王国を築いたというポセイドンがからんでいるのである。

また、この『ユリシイズ物語』には、プラトンのいうアトランティスの描写、例えば、青銅の壁、敷居、銀の戸柱、黄

金の扉、エナメル装飾などが出てくるのである。ということとは、ユリシイズ物語は、アトランティス文明のある時期の出来事を語っている、ということになりはしまいか。

実は、このユリシイズ物語と酷似した伝説が日本にある。大分県から福岡県にかけての『百合若大臣』がそれである。

ユリシイズの「ユリ」は、「百合若」の「百合」

ラテン語にいうウリクセスの「ウリ」は、「瓜生島」の「瓜」偶然にしては、あまりにも出来すぎた発音ではないか。

瓜生島の謎を解く鍵は、ここにあるのではないだろうか。

つまり、『百合若大臣物語』と別府湾に沈んだ『瓜生島沈没伝説』の中には、シユリーマンの言うユリシイズ物語の失われた部分が投影され、アトランティスの沈没の記憶とが、これに重なり合いながら、変形していった物語ではなかったか、ということである。

特に、アトランティス沈没の記憶がよみがえっていると思われるのが、百合若物語の異伝としての「玄海島」や「壹岐」に伝わる、島の沈没伝説のくだりである。これと瓜生島沈没伝説とを重ね合わせてみてほしい。

百合若大臣物語

朝廷より、九州の沿岸を荒らし回る海賊の成敗を命じられた百合若は、部下を連れ勇んで出陣した。

ほほえみを浮かべて見送る新妻の春日姫は、夫に「帰還するまでは、眠っている間も油断されませぬよう」との言葉を忘れなかった。

長い長い戦いの末、勝利をおさめた百合若は、帰還途中、とある小さな島に身を寄せたが、疲れのあまり、つい久々の眠りについてしまった。

やがて目ざめたとき、どうしたことか船も兵も島から去っていた。百合若は孤島にとり残されたのだ。

それは、かねてより謀反をたくらんでいた近臣の別府兄弟なる者が、百合若にたらふく酒を飲ませ酔いつぶしたあと、部下達をだまし、百合若一人を島に置き去りにして出帆してしまつたから、というのである。

一人になつた百合若は、何年も何年も魚や貝を食べ命をつないできたが、助けの船はいっこうに現れない。

そのころ豊後の国では、別府兄弟により百合若の戦死と数々の戦果が報告され、別府兄弟は国司に任せられ、権力をほしいままにしていた。

別府兄弟は酒色にふけり国政を乱すわ、あげくに百合若の妻・春日姫を、しつこく誘惑しようとする。

春日姫は夫の無事を信じ、百合若の飼っていた鷹の緑丸を空に放つた。

緑丸は百合若を慕って飛んでいるうち、無人島の百合若を発見する。

百合若は喜び、木の葉に血で文をしたため、緑丸の足に結びつけ、春日姫のもとへと飛びたさせた。

百合若の無事を知つた春日姫は驚喜し、折り返し、別府兄弟の悪行の数々を記した文を緑丸にたくした。

緑丸はようやくにして、それを百合若に届けた途端に力つきて死んでしまつた。

百合若は別府兄弟の悪計を知り、煮えくりかえつたものの、どうにもならない。

そんな時、幸いにも、嵐のために漂着した漁船に救われて、ようやくにして百合若は帰還をはたした。

ボロをまとい、やつれ果てた百合若は、誰にも気づかれないうちを利用して、苔丸と名乗り、別府兄弟が主催の競射大会に参加する。

苔丸は、館にあった誰も引くことのできない自分愛用の弓

を取り、

「我こそは百合若大臣なり！」と叫び、別府兄弟を、ただの一弓をもって射って取った。

こうして、百合若大臣と春日姫は、以前にもまして幸せに暮らした、というストーリーである。

どうだろうか、ここまでだと、この百合若大臣物語は、ユリシーズ冒険譚と全く同じ構造であり、変型バージョンにすぎないことがわかる。

ところがである。玄海島や壱岐に伝わるところによると、百合若は、カラス天狗に助けられる、となっている。その天狗とは女で、両手が羽、顔はカラスというかフクロウに似ている、というのである。カラス天狗は、百合若の願いを聞き入れ、空へと舞い上がった。

天狗が目指したのは「高麗曾根」という小さな島だった。そこは女王の国で、女王は男達に命じ、豊後に帰る百合若のための筏を作らせた。

筏ができ上がると、女王は言った。

「あなたは次に、マンリガ島に着くでしょうが、つらい航海の間このお酒を飲みなさい」と。

この高麗曾根という島は存在しない。なぜならば、

五島列島の高麗島には、島の守り神、恵比須の地蔵が祀られていた。

ある夜、地蔵が信仰厚い人の夢枕に立って、「余の顔色が変わったときは、この島に一大事変が起こる故、ただちにこの島を逃れよ」というお告げをした。

この話を聞いた心よからぬ者が、いたずらに地蔵の顔を絵の具で赤く塗ったところ、幾ばくもなく島が沈んだと。

さて次に、高麗島を出航した百合若は、女王の言通り、西の果てのマンリガ島に漂着した。

ここもまた、女王がいて、百合若を哀れみ、魔法の袋から出る風で、百合若を一気に豊後の国へと飛ばした。

百合若は、故郷の三本松の丘に着陸し、愛妻春日姫と、やっと再会を果たすことができた。

このマンリガ島も、今は存在しない。なぜならば、

マンリガ島は、豊かな美しい島だったが、ここでは、宮殿の「牛頭大王」の像が赤く染まると、島が沈むと言い伝えられていた。やがて島民が墮落した時、牛頭大王は怒り、そして島は沈んだと。

今、高麗島もマンリガ島も存在しないのはいずれも、神仏の怒りによって、島は沈んでしまったからなのだ。

これだと、百合若大臣の出身地である豊後で発生したという瓜生島沈没伝説と全く同じ構造ではないか。

その、神仏の怒りとは、瓜生島や高麗島では蛭子＝恵比須であったと。

恵比須といえば、鯛を釣り上げ、満身の笑み。それで七福神の中で大黒とともに最も親しみのある福の神であり、古くから漁業の神として祀られてきた。

マンリガ島では牛頭大王となっている。牛頭大王といえば、日本神話では荒ぶる暴風雨の象徴とされるスサノオのことだ。ギリシャ神話にいうポセイドンと共通点が多く比較されているから、これらをアトランティス沈没の記憶の反映とみることができる。

要するに、ユリシーズと百合若大臣の英雄譚しかり、瓜生島やマンリガ島などの沈没伝説しかり、その根っ子にはアトランティス沈没の記憶が横たわっているのではなかったか、ということだ。

あらゆる伝説の中でも、洪水伝説ほど世の中に広く分布し、かつ同一の起源を発していると思われるものはない。

神仏の怒りについて

瓜生島や高麗島では恵比須であったが、マンリガ島では牛頭大王となっているが、信仰の一番古い伝承の原形は、かの太平洋上に沈んだという「ムー大陸」にあったようだ。日本は地理的にみて、ムー大陸と密接な関係にあったのは明らかである。

ムー大陸の实在を世に知らしめたのは、ジェームズ・チャーチワードというイギリス人であった。チャーチワードは晩年、日本人にあてたメッセージともいえる次のような文を残している。

「私は日本に残るさまざまな遺跡、伝承、風俗などのなかに、失われたムー文明を解く鍵があるような気がする。残念ながら私は年老いて、もう日本へ行くことはできそうにないが、日本の方々がこれらこの問題に取り組んでくれることを願ってやまない」と。

要するに日本人は、沈んだムーの生き残った人類の遺伝子を引いているはず、と彼は言っているのである。そこで筆者は、チャーチワードの願いに叶いそうなものを採集していっ

たが、確かに、チャーチワードのいうムー文明を解く鍵が日本各地にあった。

ムー文明では、古来より神として崇められてきたのは「蛇」(竜)であった。

これの名残とも感じさせる伝説、即ち竜蛇神と人間とが交合う、俗にいう「神婚伝説」とか「異類婚姻譚」というものをはじめ、日本の神話・伝説の中には、ムー大陸沈没の危機や、生き残った民族の移動、そして日本への上陸などの記憶の片鱗が、どこかしこに反映されているように思う。

日本の、いや、世界の神話・伝説の中には洪水にちなんだもの、そして「竜」(龍とも表記されるが、本書では竜に統一す)や蛇をモチーフとしたものがいかに多いことか。

例えば、聖書にいわく、「ノアの大洪水」伝説をはじめ、ヘビの棲むエデンの国で、アダムとイブ(エバ)が知恵の木から実を取って食べたところ、蛇から罰を受けたといったのやら、日本神話では、スサノオ命がほれた娘を助けるために八岐大蛇を退治したとか、後述する半魚人のような鰐わにに変身して御子を出産し、海に去ってしまったという「豊玉姫神話」等々。

洪水は恐怖体験の象徴であるけれども、竜や蛇、即ち爬虫類は人類原初の姿の記憶の反映であり、同時に竜を祖神として仮託しての畏敬の念ではなかったか。

人々のあらゆる恐怖体験は、トラウマ的集合意識となる。ただ、その記憶は、時の経過とともにどんどん曖昧になるが、潜在意識に深く刻みこまれて残る。これが、神話や伝説の形に昇華されていき、後世まで語り伝えられていくのである。しかし、語り伝えられていくうちに、また違った恐怖体験がこれに継ぎ足され変型していき、ストーリーに一貫性がなくなってしまうのだ。

一方で、古事記の神話が旧約聖書の焼き直しではないかとされ、その旧約聖書が同様にシユメール文書と類似している点等々、世界各地の神話・伝説の記憶の根っ子は、日本の縄文早期、即ちムーやアトランティス大陸の沈没の一万二〇〇年前の時期から息づいていた、それが縄文土器や土偶にみる情緒性の開花であり、これに端を発した種が世界各地に広まっていった、ということではないだろうか。

即ち、ムー文明の記憶の起源は日本であり、それが世界各地に広がり、シユメールのメソポタミア文明やエジプト、インダス文明をはじめ、ヨーロッパや西アジア方面で、見事に

文明を華開かせては、そしてまた崩壊とをくり返してきたのではなかったか。

しかし、その記憶の遺伝子は、「光を東方」に求めてまた日本へともどってくる。いわゆるブーメラン現象が太古の昔から幾度となく起きたに違いない。

日本の縄文文化に、それははつきり現われている。

これまでの縄文時代のイメージを塗り変えたスケールの青森県の三内丸山遺跡をはじめ、おどろおどろしいまでの爬虫類の姿を思わせる火焰土器の装飾（新潟県十日町市）や、青森県亀ヶ岡遺跡出土の、高度なセラミック工法の遮光器土偶、秋田県大湯の環状列石（ストーンサークル）などの崇高な芸術性は世界に類を見ないほどの高度な文明の様相である。

縄文文化のハイクオリティな土器や土偶に見るように、芸術的感性の高さや情緒を、縄文人は文字や言葉はなかったから粘土や石によって表現してきた。それらは、主に祭祀、呪術に利用してきたらしいから、ここに信仰の根源をも見るこ

とが出来る。

一方の弥生時代のそれは、実用性や機能性を重視したので、デザインがのっぺりとして味気ない。それもそのはず、いわゆる農耕文明に即して食器としての利用性が主であったか

らだ。

縄文人は、すべての自然物に神が、霊が、宿ると考えていた。たとえば、木を一本伐るにしてもおうかがいをたててきた。だから、土器や土偶のデザイン、そして石の建造物の設計も神（霊）との交流によって呪術的な次元ではたしてきたはずで縄文世界は、神の領域^①といっても過言ではなかった。

さらには、ピラミッドの原形ではなかったかと思わせる位山（岐阜県）、剣山（徳島県）、皆神山（長野県松代）、葦嶽山（広島県庄原市）などの人工的な山々や、各地の数々の磐座、巨石建造物とおぼしき遺構は、建築基礎の原形を伺わせている。叡智の源泉はムー文明であったが、その記憶の遺伝子は残り、世界各国へ拡散していき、やがては日本にもどってきて再構築されたはずだ。

その代表的なものが、チグリス・ユーフラテス川の三角地帯に開花した人類最古とされる、かのシュメール文明の神話である。シュメール文明の始まりは、ある日忽然と出現したとしか表現できないほど唐突である。しかも、幾層にも重なった都市遺跡を発掘していくと、なんと、いちばん古いはずの最下層の遺跡がもっとも発達しているのだ。

現在のイラクの首都バグダットから約四〇〇年キロの古代

アッシリアの首都ニネヴェから、シュメール人自ら語った粘土板が発見された。これが、シュメール文書と言われるもので、埋められたのはBC二〇〇〇年頃らしい、即ちウル第三王朝が滅亡した後、シュメール文明が歴史の表舞台から忽然と消えたとされる頃である。

ちょうどその頃、日本では、縄文文化の最高峰とされる、先の三内丸山遺跡も忽然と消えていったとされる頃である。二度の気温低下で、食糧が壊滅し、人々は三内をすて、海洋民族となって丸木船に乗って、と考えられている。

つまり人類や文明は、時間の流れとともに高度なものへと進化・発展したわけではなく、突如として最高峰のものが出現しては突如として滅び、またどこかで出現、というのを繰り返してきたのだ。

そう考えなければ、知識もなければ道具も持たないはずの未開民族の地に、現代数学にも匹敵する数学体系を打ち立て、驚くべき天文知識をもつての洗練された建築物の数々が世界各地にあるのを説明出来ない。

エジプトのピラミッドは、その最たるものだ。

古代エジプトでもシュメールのように忽然と砂漠に出現し、瞬間に複数の巨大なピラミッドを建造しているからだ。

いうまでもなく、大ピラミッドやスフィンクスを建造するためには高度な土木テクノロジーが必要で、そのためには相
当の文明の蓄積が要求される。ところが考古学的に確認できるのは原始的な農耕の痕跡のみで、中間段階の文明はまったく
発見できないのだ。

つまり、古代エジプト文明も自然的なものではなく、どこかほかからもたらされたと考えるほうが合理的なのである。

なお、バビロンのイシュタル門はシュメールの流れをくむカルデア王朝の時代に建てられたものだが、そこには日本の
天皇家と同じ十六弁の菊花紋が彫られ、しかも「王家の紋」と呼ばれているのだ。この様な事例は枚挙にいとまがない。